

構文化と脱従属化

前 田 満

1. 序論

従来の文法観では、構文の概念は小さな単位から大きな単位へと文法規則にしたがって組み立てられる、いわば有名無実の派生概念とみなされてきた（例えば、Chomsky (1991 : 417) を参照）。しかし1990年代の構文文法（construction grammar）の台頭により構文観も一変し、その結果、構文は文法の主要な単位としてみごとに復権を果たした。それどころか、構文は文法の中心的な構成要素とさえみなされるようになった（Fried and Östman (2008 : 12)）。この構文観の変化により、構文研究の一大潮流が生まれ、これまでに膨大な研究がなされてきた（Fillmore, Kay, O'Connor (1988), Goldberg (1995, 2006), Fried and Östman (2004), Fried and Boas (2005), Hoffmann and Trousdale (2013), 秋元・前田 (2013), etc.）。これらの研究の結果、反復使用による慣習化（conventionalization）が構文理解の鍵をにぎることが明らかになった。慣習化は通時的なベクトルを内包するプロセスなので、これは構文研究における通時的な次元の重要性を暗示する。しかし、現状では構文の通時的な考察はまさに例外的というほかはない。

さて、本格的な構文の通時的研究の開始を告げる狼煙となったのは、Bergs and Diewald (2008) の刊行で、これは「構文」の概念を表に立てた初めての通時的研究の集成である。「構文化」（constructionalization）という述語が正式に登場するのもこの文献が初である。構文化研究に対するさらなる大きな貢献は、構文の発達を使用依拠モデル（usage-based model）および文法化（grammaticalization）との関わりで論じた Bybee (2010) である。また E. C. Traugott と G. Trousdale による出版準備中（本稿の執筆時点）の著書のタイトルは、まさに *Constructionalization and Constructional Changes* で、今後の構文化研究にとってきわめて重要な貢献となるものと期待される（cf. Traugott (2012)）。この流れを受けて、近年では、構文の通時的研究が徐々にではあるが着実に勢いを増してきている（cf. Traugott (2008a, 2008b), Langacker (2009), Gisborne and Patten (2011), Hilpert (2013), 秋元・前田 (2013), etc.）。

さて、本論では、以上のような構文研究の現状を勘案し、ささやかな事例研究を通じて構文化の特性とメカニズム、そして構文化研究の意義と可能性を示したい。本論で扱うのは、脱従属化 (insubordination) と呼ばれる現象である。脱従属化とは、本来従属節であったものが再分析により主節へと「格上げ」される現象をいう (cf. Evans (2007))。本論で脱従属化をとり上げるのは、この現象の説明には構文化という視点が不可欠であり、そのため構文の通時的分析の重要性をご理解いただくうえで誠に好都合だからである。

本論の構成は以下のとおり。2 節では、まず構文および構文化の概念を導入し、構文化のパターンをいくつか紹介する。次に、3 節では、いくつかの事例を通じて脱従属化の特性について概観し、問題提起を行う。4 節では、Bybee (2001, 2007, 2010) にしたがって構文化のメカニズムについて説明したうえで、なぜ脱従属化が可能となるのかを考察する。5 節では、4 節の考察を受けて脱従属化のメカニズムを提案する。6 節は本論の簡単なまとめである。

2. 構文と構文化

先ほども見たように、1990年代を転機に、かつては単なる派生構造とみなされてきた「構文」がみごとに復権を果たした。この革命的变化の立役者の1人が A. E. Goldberg である。Goldberg の力点は、構文それ自体が独立した記号——意味と形式の対——をなすという主張に置かれた。これは、構文の意味が個々の構成要素の総和から予測できないこと、また構文は規範から逸脱した独自の特性をもちうることを意味する。(1) の定義が示すように、Goldberg は当初規範からの逸脱を構文認定の必要十分条件として規定した。

- (1) C is a CONSTRUCTION iff_{def} C is a form-meaning pair $\langle F_i, S_i \rangle$ such that some aspect of F_i or some aspect of S_i is not strictly predictable from C's component parts or from other previously established constructions. (Goldberg (1995 : 4))

この定義の意義をご理解いただくために、「形式的イディオム」(formal idiom) と呼ばれるタイプの構文を見てみよう (Fillmore et al. (1988))。形式的イディオムとは、固定された部分と自由に語彙挿入が可能なスロットをあわせもつタイプの構文である。(2) の感嘆文は典型的な形式的イディオムのひとつである (cf. 前田 (2013))。

- (2) a. What a beautiful day it is!

- b. How wonderful it is to see you!

これらの構文は、統語的にも意味的にも現代英語 (PE) の一般規則にしたがわない。例えば、疑問詞 what の後に不定冠詞 a(n) が置かれる構造は、この構文のみで許される特異な構造である。また、この構文は主文における wh 句の前置に主語・助動詞倒置 (Subject-Aux Inversion) を示さないという点でも PE の文法規則から逸脱し

ている。Fillmore et al. (1988) は、このような文法規則に反する特性を「外文法的」(extragrammatical) と呼ぶ。解釈の点からも、この構文に特有の感嘆の解釈を wh 疑問文に類似した表層構造から予測することは至難の業である。以上の点から、(2) の感嘆文は (1) の定義により独立した「構文」として認定される。

近年になってさらなる構文観の変化が生じた。この新しい構文観では、先ほどの (1) において扇の要となっていた規範からの逸脱は、もはや必要十分条件とはみなされない。すなわち、Goldberg (2006) は (2) の定義に以下の但し書きを付け加えた。

(3) ... patterns are stored as constructions even if they are fully predictable as long as they occur with sufficient frequency ... (p.5)

(3) によると、規範からの逸脱を示さず、しかも合成的な解釈が可能な表現であっても、使用頻度さえ高ければまさにそれだけで構文と認定される。とくに近年では、構文の定義における使用頻度の重要性がますます強調されている (cf. Bybee (2001, 2007, 2010))。¹

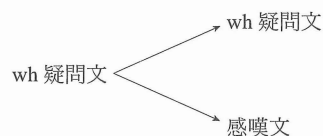
次に、構文化とは構文の形成プロセスを指す。構文化には大別して2つのパタンが存在する。まず、使用頻度の高い自由コロケーションが固定されて新規の構文フレームを形成するパタンがある。本稿ではこれを「コロケーション固定型（構文化）」と呼ぶ。コロケーション固定型は、主にイディオムの形成（秋元（2002））や句動詞・迂言形式の形成（Matsumoto（2008））に関与するプロセスである。例えば、ラテン語の *habere* ‘have’ と不定詞 (e. g. *cantare* ‘to sing’) の組み合わせによるロマンス語の未来時制 (e. g. French, *chanterai* ‘I will sing’) は、このタイプの構文化の産物である（この発達については、Price (1984 : 199–200) を参照）。

(4) *cantare* + *habeo* > [*cantare* = *habeo*] > *chanterai*
 構文化 融合

しかし紙幅の関係上、本論ではこのタイプの構文化には深入りしない。

Bybee (2010) も指摘するが、現実にはコロケーション固定型よりも既存の構文からの分岐による構文化が一般的である。このタイプの構文化を筆者は「分岐型（構文化）」と呼ぶ。分岐型の好例は (2) にあげた感嘆文の発達である。詳細は省くが、感嘆文は 17～19C にかけて wh 疑問文から分岐して生じた構文と考えられる（前田（2013））。

図 1：構文分岐



この発達は、wh 疑問文の 1 つの用法が感情表出に特化したことに起因する。この機能

特化に伴い、主語・助動詞倒置が廃止されるなどいくつかの外文法的な特性が発達し、wh 疑問文との構造的差別化が生じたが、現在でも構文フレームの輪郭は wh 疑問文を髣髴とさせる。Bybee (2010) が扱うのは主にこのタイプの分岐型構文化で、本論では顕著な形式的変化を伴わないという意味で「単純型」と呼ぶ。

また Bybee は論じていないが、分岐型にはもう 1 つ主要なパターンが存在する。これは構成要素の脱落を伴う構文分岐で、その 1 例が先にふれた「脱従属化」である。例えば、初期近代英語 (EModE) 期には (5) のようなある種の感嘆文が見られた。一見したところただの補文に見えるが、通常の補文に見られない特別な解釈を有する。

(5) Ah that deceit should steale such gentle shapes ... (Shakespeare, *Richard III*, ii, 2)

この構文は従属節であったものが主節の脱落によって主節に「格上げ」されたものと考えられる (3 節)。本稿では、このタイプの分岐型構文化を「要素脱落型」と呼ぶ。² 本論が焦点をあてるのはこのタイプの構文化である。

本節の議論をまとめると、構文化には次のようなパターンが見られる。

- a. コロケーション固定型
- b. 分岐型
 - i) 単純型
 - ii) 要素脱落型 → 脱従属化

3. 脱従属化

本節では、具体例を通じて脱従属化の特性を浮き彫りにしたい。まず初めに PE 口語に見られる次の構文に注目してみよう。

(6) a. Like I care about that,

b. Like I'm jealous of that!

Haiman (1995 : 330) によると、この構文は否定と同時に侮蔑的な態度を表し、和訳するとおよそ「～のわけがない」ほどになる。筆者はこれを「like 否定構文」と呼ぶ。もともと否定構文といっても否定辞はどこにも見あたらない。なのになぜこの構文に否定の意味が生じたのだろうか。この問いの答えは意外にも明らかである。というのも、like 否定構文は、否定的な主節 *it's not* をもつ (7) の構文——以下、「not-like 否定構文」と呼ぶ——の省略形だからである (鈴木・安井 (1994 : 310–311) に言及がある)。つまり、(6) は (7) の従属節部分にあたる (口語英語において like はある種の補文標識として使われる)。

(7) a. *It's not* like I care. (=Like I care.)

b. *It's not* like he doesn't watch TV.

結局、like 否定構文の否定的意味は、母体となる not-like 否定構文の否定辞 *not* に由来すると考えるほかはない。じっさい両構文とも解釈および談話機能に大きな違いがない。Not の省略にもかかわらず構文の解釈に顕著な変化が見られないという点は注目に値す

る。

またフランス語には、不定詞節が単独で命令文として働く構文がある。これを「独立不定詞節」と呼ぶ（不定詞に強調を施した）。

(8) *Mettre vingt grammes de beurre dans la poêle.*

‘Put twenty grams of butter in the pan.’ (Batchelor and Chebli-Saadi (2011 : 285)) Grevisse (1980 : 859) などによると、独立不定詞節は標識や商品の指示書など不特定多数の聞き手を対象とするポライトな命令文として使われる。しかしなぜ不定詞節が単独で生起しうるのだろうか。Luker (1916) は、独立不定詞節を (9) のような遂行的構文——「遂行的述部+INF 構文」と呼ぶ——の *on doit* ‘one must’、*il faut* ‘it is necessary’ といった主節が省略されて生じた構文とみなしている（主節部分に強調を施した）。³

(9) a. *On doit voir page cinq.* (> *Voir page cinq.* ‘See Page 5.’)

‘One must see Page 5.’

b. *Il faut agiter le flacon.* (> *Agiter le flacon.* ‘Shake the flask.’)

‘It is necessary to shake the flask.’ (Cf. Luker (1916 : 24))

ここでも重要な点は、独立不定詞節と遂行的述部+INF 構文はどちらも等しく「指示」を行うための遂行文として——ある種の命令文のように——用いられるということである。しかし不定詞節のような従属節構造は通常単独では発語内の力をもちえないので、発語内の力が省略された主節に由来すると考えるのはきわめて自然である。

次に、筆者が「疑似従属節感嘆文」と呼ぶ構文に移る。この構文においても、従属節起源の構造が独立した発話をなし、ある種の感嘆文として使われる。主に ModE 期に用いられたが、とくに文語では PE まで使用されている (cf. (9d))。⁴

(10) a. *Ah that deceit should steale such gentle shapes ...* (Shakespeare, *Richard III*, ii, 2)

b. *O God, that we should let Chamont escape!* (B. Jonson, *The Case Is Altered*, v, 4)

c. *Ay, and that Rachel, such a virtuous maid, should be thus stolen away!* (Ibid.)

d. *Alas, that there should be such booldshed in my time!*

(E. A. Thompson, *The Goths in Spain*, p. 162)

e. *This was a fortune happy above thought, that this should prove thy chamber.*

(B. Jonson, *The Devil Is an Ass*, ii, 2)

(9a-d) にはいわゆる「感情の should」(emotional *should*, 以下 *should*^E と略記) が見られるが、ModE 期において、*should*^E 補文は感情的叙実述部 (emotive factive predicate) においてかなり頻繁に使われた (cf. (9e))。 *should*^E の発達については、前田 (2003) で論じたので詳細は省く。ところでなぜこの補文構造は感情的意味を表すようになったのだろうか。この点に関して、Visser (1969 : 1654) は、(9a-d) タイプの構文を *it's a pity* や *what a shame* など感情的意味を表す主節の省略によって生じたものとしている。これが正しければ、(9a-d) の表わす感情的意味が省略された主節の意味に由来すると考える

のはごく自然である。

以上、脱従属化が関与する3タイプの構文を見てきたが、これらの構文に共通する点は、どれも母体となる構文から主節の脱落によって分岐したと考えられること、また主節の脱落后も基本的に同じ談話機能を保持し続けたということである。では、ここでひとつ問題提起をしたい。そもそも主節のような文解釈に不可欠な要素の省略がなぜ可能となるのだろうか。通常このような要素の省略には復元可能性の制約 (recoverability condition) が課される。見たところ脱従属化における主節の省略はこの制約に反するようと思われる。

じっさい復元不可能な主節の省略は一般に不可能である。例えば、not-like 否定構文 (6) に似た (11a) の主節は省略できない (つまり、(11b) は out of the blue のコンテキストでは何の意味ももたない。ましてや否定文とは解釈できない)。

(11) a. It's not that winter depresses me.

b. * That winter depresses me.

しかも (12) のように、it's の部分のみを省略してもとくに解釈上の問題が生じない点からすると、(11b) と (12) の対比には、not の省略が深く関与していると考えざるをえない。

(12) Not that winter depresses me.

これは否定辞 not に命題の論理関係を変える働きがあり、そのぶん it's の部分よりも復元可能性の制約が強く働くからだと思う。ではなぜ like 否定構文では同様の省略が許されるのだろうか。結局のところ、like 否定構文を生みだした省略では何らかの特殊な要因が働き、それが復元可能性の制約を無効にしたと考えるほかはない。

同じ問題が独立不定詞節や疑似従属節感嘆文に関しても生ずる。Luker (1916) と Visser (1969) はこれらの構文が主節の省略によって生じたと主張しながら、復元可能性という問題を考慮に入れていない。彼らの主張を擁護するためには、何よりもまず主節の省略が復元可能性の制約をクリアした理由を説明しなければならない。じっさい独立不定詞節をもたない英語の遂行文の主節を out of the blue に省略することはまったく許されない。

(13) a. * To do it. <I want you to do it / I order you to do it.

b. * To learn English hard. <It's necessary to learn English hard.

c. * That he go there. <It is necessary that he go there.

(13) に '*' で示したように、out of the blue のコンテキストでは、(13a-c) のような単独の補文は何の解釈ももたない。ましてや遂行文とは解釈できない。過去にこの事実に対する説明がなされた例を筆者は知らないが、⁵やはりここでも復元可能性の制約による説明が最も見込みがあるように思われる。なぜなら、(14) に示すように、欠けた内容を示唆する情報が先行するディスコースにあれば主節の省略が許されるからである。

EMoDE の例を（14b）に示す。復元可能性の制約は時代をこえたディスコースの制約である。

（14） a. A : Archie, you promised me.

B : That's right. I did ... *To experience the thrill of a slam dunk by my side.*

b. A : How! does he bid you to anger me for exercise?

B : *Not to anger you, but stir your blod a little* ... (B. Jonson, *Catiline*, ii, 1)

（14a-b）では、A の発話の下線部分が B の発話の欠けた部分を埋める手がかりとなっている。独立不定詞節がこのような先行する文脈を受けての発話だったならばまったく問題はない。しかし、独立不定詞節はある種の命令文なので、先行する発話を受けて用いられる可能性はきわめて低い。というのも、命令はその性質上、一般に *out of the blue* かつ一方的になされるからである（独立不定詞節が標識などに使われることを想起されたい）。同じことは疑似従属節感嘆文にもあてはまる。感嘆文はしばしば *out of the blue* に発話される。（15）の例を参照（B. Jonson, *Synthia's Revels*, i, 1）。

（15） A : This Crites is sour—I will think, sir.

B : Do so, sir.—O heaven! *that anything in the likeness of man should suffer these Rack'd extremities*, for the uttering of his sophisticate good parts.

（13）と（14）の対比からすると、従属節を *out of the blue* のコンテキストにおいて単独で使用するとは何らかの文法規則に違反するものと考えられる。この意味で、従属節の独立使用はそれ自体が外文法的であるといえる。したがって、脱従属化をへた構造は（1）の定義によりすべて独立した「構文」と認定される。脱従属化における主節の省略が可能となるためには、このプロセスに特有な何らかのファクターが必要である。筆者の考えでは、このファクターとは、復元可能性の制約を無効にするような意味変化である。

4. 構文化のメカニズムとゲシュタルト化

本節では、前節の最後にふれた「特別なファクター」とは何かという問題について構文化の観点から論ずる。しかしこの問題に移る前に、まず構文化のメカニズムについてひととおり概観しておく必要がある。以下の説明は、Bybee (2007, 2010) の主張に筆者の見解を加味したものである (cf. 秋元・前田 (2013))。

まず、Bybee はチャンク形成 (chunking) を構文化の基盤となる認知プロセスとみなしている (Bybee (2010 : 34, 57))。チャンク形成とは、高頻度で共起する特定の記号列をチャンク (chunk)、すなわちひと塊の認知ユニットとして処理する認知プロセスのことをいう (Bybee (2010 : 34))。かくして形成されたチャンクは、単一のユニットとして記憶に貯蔵され、独立の項目としてレキシコン (Lexicon) に登録される。チャンクを構成する記号列は全体的に処理されるため、その解釈はそれを構成する個々の要素か

ら合成的に算出されるのではなく、1つのゲシュタルト (gestalt) としてホリスティックになされる。このようなモードの処理が頻繁に繰り返されると、チャンクを構成する個々の要素はしだいに認知的な顕著さを喪失する。このプロセスは、一般に音声的融合 (fusion) として形式面に反映され、また合成性 (compositionality) の縮減として解釈面に反映される。結局のところ、使用頻度の高まりこそが構文化の発端でありかつその推進剤であることになる。

図2に自由コロケーションからチャンクの段階をへて新規の構文フレームが生まれるプロセスを示した(‘=’はチャンクの関係を、‘[...]’は形成された構文フレームを表す)。

図2：フレーム形成

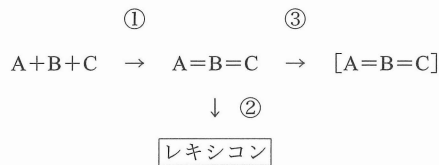


図2の①のプロセスが先ほどふれたチャンク形成である。また、②に示すように、新たに作られたチャンクはすぐさまレキシコンに登録される。しかしチャンクが新規の構文へとさらなる発達をとげるかどうかは、ひとえにその後の使用状況による。その後も高い頻度で使用され続けられれば、チャンクはより固定度の高い新規の構文フレームへと発達する(③)。筆者は図2に示した一連のプロセスを「フレーム形成」と呼ぶ。

さて、コロケーション固定型において中心的な役割を果たすのがこのフレーム形成である。例えば、pick and choose「えりすぐる」というイディオムの形成は、pick、and、chooseという語が、表現上の目的のためにコロケートされ、それがたまたま頻繁に使われたために生じたのである。またチャンク形成は、分岐型においても重要な役割を果たしている。既存の構文フレームが特定のコンテキストで頻繁に使用されると、その用法にチャンク形成が適用され、独立した項目としてレキシコンに登録される。これを契機に同じ構文フレームの他の用法からの自律性が高まり、最終的には独立した構文へと分岐する(図1)。

さて、Bybeeによると、チャンク形成が生ずる条件は記号列の共起頻度のみであって、要素間の意味関係の有無は必然ではない。これはチャンク形成によるとされるいくつかの縮約現象において、要素間に特別な意味関係が存在しないからである。例えば、英語の I'm (<I+am) や I've (<I+have) などがそれにあたる。しかし、筆者の考えでは、新規の構文へとさらなる発達をとげるためには、図2の‘=’には、単なる共起以上の意味・機能的動機が必要である。要するに、構文化へとつながるコロケーションは意味・機能的関係によって動機づけられたものでなければならない。先ほどふれた縮約のケー

スのような意味・機能的動機のないチャンクでは、チャンク形成が適用されても特別の意味変化は生じない。またこのようなチャンクは新規の構文フレームへと発達しない。

一方、新規の構文フレームへとつながるケースでは、一般にその萌芽となる自由コロケーションは表現上の動機に基づいて作られる。そのようなコロケーションが特定のコンテキストにおける反復使用を通じて特定の談話上の目的と結び付けられると、使用頻度が高まり、新たにチャンク形成の対象となる。この場合、チャンク形成の結果生ずる図2の‘A=B=C’は、先ほどの‘I’m’のような縮約のケースと異なり、単なる認知的ユニットというよりは「擬似イディオム」とでもいうべき意味・機能的なユニットとなる。

このような‘A=B=C’では、チャンク形成とともに意味変化が生ずる。これは一般に「合成性の縮減」と呼ばれる現象である。筆者の考えでは、これはいわば要素間の意味の共有である。すなわち、チャンク形成の進展とともにそれを構成する要素の意味が他の要素へと浸透して混交し、これにより個々の要素が意味的顕著さを失うのである。これは個々の要素の意味が構文フレーム全体に浸透することを意味する。この意味変化に初めて着目したのは Bréal (1900 : 200–202) で、彼はこれを「伝染」(contagion) と呼んだ。例えば、有名なフランス語の複合否定 ‘ne ... pas’⁶ (cf. *Je ne sais pas*. ‘I don’t know.’) では、もともと「一步」の意の pas (<Latin, *passum* ‘foot’) に ne ‘not’ の否定の意味が「伝染」し、pas が単独で否定を表すに至った。つまり、Bréal は、ne の否定の意味 (<NEG>) が pas に転送され、ne と pas の両方が否定を表すようになったと考えた。

(16) ne ... pas > ne = ... = pas
 <NEG> <NEG> <NEG>

これは現在の構文文法の枠組みでは、ne の<NEG>が構文フレーム全体に浸透することを指す。Bréal も指摘するように、このような意味変化が生ずるためには、要素間に疑似イディオム的な関係が必要である。ne と pas の場合は、後者による前者の強調という機能的関係に基づくものである。筆者はこの意味変化を「ゲシュタルト化」と呼ぶ。

このような意味の共有は特殊なケースにかぎって見られるものではない。むしろこれは構文化では一般に見られるプロセスである。すなわち、構文が発達するにつれてしだいに合成性が失われていくのは、構文を構成する個々の要素の意味がゲシュタルト化によって構文フレーム全体に浸透していくからだと考えられる。このような意味変化が生ずると、個々の項目は意味の特定性を失い、「偽記号」とでもいうべきものへと変化する。Chafe (2008 : 266) は、このような機能を喪失した要素を ‘quasi-semantic’ と呼び、これらの要素について ‘they behave as if they were semantic although they no longer are’ (引用元の強調) と述べている。Chafe が指摘するように、現実の言語には ‘quasi-semantic’ な要素が多数混在しているが、過去の言語研究では、イディオムの分析以外ではこれらの要素に対して特別な注意を払ってこなかった。このため、通常の記号と筆者のいう「偽記号」を区別せずに混同して扱うということも珍しくなかった。

少々話がそれたが、筆者の考えでは、主節の省略を可能とする「ファクター」とはまさにこのプロセスにほかならない。上述のように、ゲシュタルト化とは構文の構成要素間でなされる意味の共有である。例えば、like 否定構文では、構文化にともなって主節の not の意味が構文フレーム全体に浸透する。すると構文フレーム全体が否定の意味を共有し、not それ自体はもはや形だけの「偽否定辞」(Chafe (2008) のことばでは ‘quasi-semantic negative’ とでもなろうか) へと変化し、通常それに対して課される復元可能性の制約は無効となる。筆者は、このようなケースにおいて、構文フレーム全体がその構成要素に課される復元可能性の制約を満たすことを「復元可能性の内部充足」と呼ぶ。復元可能性という観点からすると、like 否定構文における否定辞の省略は、このような想定がなければ説明できない。じっさい、like 否定構文における not の省略に対して原理的な説明がなされた例を筆者は知らない。

さて、筆者が以上のように考えるのは、否定辞の省略が相応のイディオム性を示す構文にしか見られないからである。否定辞の省略は、先ほどふれた ‘ne...pas’ に加えて、口語英語の常套句 I couldn’t care less 「関心ないね(これ以上無関心になれない)」にも見られる。後者は、ときに not が省略されて I could care less となるが解釈は変化しない (Spears (1997 : 201))。このような省略を説明するためには、ただ単に not の意味が抽象化ないしは漂白化を受けたといった想定では十分ではない。むしろ省略された not の意味が構文フレーム全体に浸透したからこそ not がなくても否定の概念を表すことができるのである。復元可能性の制約に反する省略が構文とみなしうるイディオムの表現にのみ頻繁に見られるという事実は、構文化とゲシュタルト化の密接な関係を示している。

これに関連して、言語における省略現象をつぶさに観察すると、本稿でふれた主節や否定辞の省略に加えて、(17) のような様々な前置詞の省略が見られる。

- (17) a. Betty’s busy (in) working.
b. I wish I could spend the day (in) boating with my best girl.
c. I had trouble (in) deciding which gown to wear.
d. You are taking me to the movie (on) Friday?
e. The public is very much into ecology (in) these days.

過去の研究では、このような省略についても十分な説明がなされていないが、筆者はこれらの省略もまたゲシュタルト化とそれによって生ずる「復元可能性の内部充足」によって説明できるのではないかと考えている。というのも、省略された前置詞は例外なくイディオム性の高いフレーズ内にあるからである。しかし、紙数の関係上、これらについてはもっか準備中の筆者の研究でとりあげることにしたい。

5. 脱従属化と構文化

本節では、3 節で紹介した脱従属化の事例の発達プロセスについて考察し、これらの

構文の諸特性は構文化という観点抜きには説明できないことを示す。

まずは脱従属化についていくつかの重要な点を指摘することから議論を始める。第一に、脱従属化と単なる主節の省略（cf. (14)）を区別する基準は構造的再分析の有無である。(18)は脱従属化のプロセスを模式化したものである（‘ ϕ ’は省略された主節構造を示す）。

(18) MC+SubC > [MC=SubC] > [ϕ =SubC] > [SubC]

①構文化

②主節の省略

③構造的再分析

①のプロセスについては後まわしにして、まずは②以降の発達プロセスに注目したい。脱従属化の初期段階では、省略された主節（(18)の‘ ϕ ’）の存在が話者に意識されている。つまり、この段階では‘ ϕ ’は構造的に存在し、[ϕ =SubC]はいまだ複文構造を保持している。これに対して、脱従属化の結果生じた構文はすでに複文構造を失った単文構造であると考えられる。この想定にはやや議論の余地があるが、現在では *That things should come to this!* に対して複文構造（[ϕ =SubC]）を想定する研究者はおそらく皆無だろう。発達のどこかの段階で主節構造‘ ϕ ’が失われたことは確かである。

もっとも省略構造が「生きた」もの（[ϕ =SubC]）なのか「化石化した」もの（[SubC]）なのかを表層構造のみから判断する術はない。そもそも再分析は定義上、表層構造に変化をもたらさない再構造化なので、これはいたしかたない（cf. Harris and Campbell (1995)）。結局、省略構造が[ϕ =SubC]か[SubC]かの判断は話者の直観に頼るほかはない。このため、文献資料のみからこの点を判断するのは至難の業となる。実際、例えば「そのような省略は品がない」といった省略を示唆するようなメタ言語的コメントがなければ、文献資料からこの点を詳らかにする望みはない。この資料の不足は現代語の類似構文との比較によって補うほかはない。口語英語の *like* 否定構文に言及したのはまさにこのためである。


上述のように、この構文が *not-like* 否定構文の省略形であることは現在も母語話者により意識されており、そのかぎりにおいて、*like* 否定構文は [ϕ =*like* (*p*)]（複文構造）と分析可能である。要するに、*like* 否定構文はもっか構造的再分析（(18)の②>③）の途上——したがって、脱従属化がいまだ未完了の発達段階——にあり、これを参考に疑似従属節感嘆文などすでに脱従属化が完了したと思われる構文の在りし日の姿をイメージすることが可能となる。実際、*like* 否定構文などの観察により、脱従属化では一般に[ϕ =SubC]の段階をへて[SubC]が生ずるものと想定することができる。

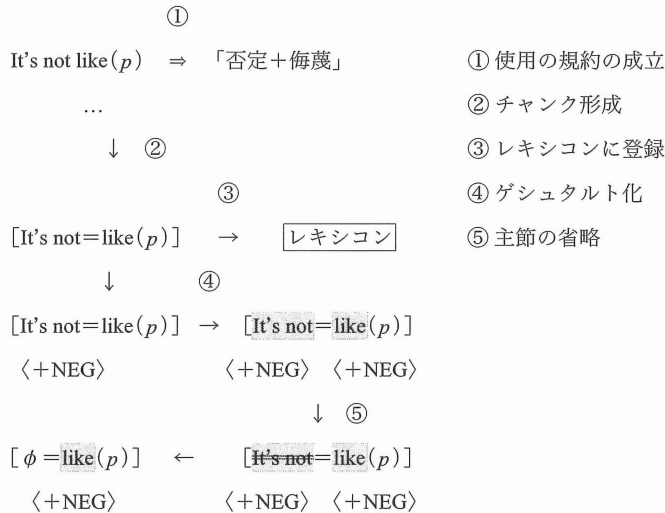
4節で論じたように、構文化の基盤となるプロセスはチャンク形成である。(18)にも示したが、脱従属化が生ずるためには、まず母体となる構文の特定の用法に対してチャンク形成が適用されねばならない。チャンク形成は使用頻度の高い記号列に適用されるが、記号列の使用頻度が高まる要因のひとつに特定の談話機能への特化がある。表現が特定の談話機能のためにくり返し使用されると、Morgan (1978) が「使用の規約」

(convention of usage) と呼ぶルーティン化が生じ、使用頻度がさらに高まる。上述のように、not-like 否定構文は否定と同時に侮蔑的な態度を表すという発話行為に特化し、このために ‘it’s not like ...’ の本来の用法から分岐し、独立した構文への道を歩み始めたのである。すなわち、脱従属化による構文の大半が少数の談話機能への特化を示すが、この機能特化こそが使用頻度を高める起爆剤となり、最終的に脱従属化へと至るお膳立てを整えたのである。

さて、前節で論じたように、構文化にはゲシュタルト化が伴うが、脱従属化における主節の省略は、その結果生ずる「復元可能性の内部充足」によって説明できる。すなわち、(18) の①から②にいたるプロセスのどこかで、母体となる構文の主節の意味成分が構文フレーム全体に浸透し、それを構成する要素に共有される。not-like 否定構文においても、このプロセスが起こった結果、主節 it’s not に対して課される復元可能性の制約が無効となったと考えられる。じっさいに主節 it’s not の省略がなされ、 $[\phi = \text{Like}(p)]$ が生じたことがこの意味変化の証左である。⁷そして話者の意識において Like I care が $[\phi = \text{Like}(p)]$ から単純な $[\text{Like}(p)]$ へと変化したときに脱従属化は完了する（上述のように現在未完了）。以上に見てきた like 否定構文の発達の全体像を図3に示す。

図3：like 否定構文の発達

(‘⇒’=使用の規約；=偽記号；〈+NEG〉=否定の意味)



もっとも like 否定構文は脱従属化としてはシンプルなケースに属する。この構文の発達では、it’s not という固定した主節のみがゲシュタルト化に参与している。一方、不定詞節のケースでは、不定詞節に対して、il faut や on doit のような遂行的に使用され


うる複数の主節が関与している。これに関連して重要な点は、like 否定構文と異なり、独立不定詞節の発達では、 $[\phi = \text{SubC}]$ から $[\text{SubC}]$ への再分析に微妙な機能的変化が伴うという事実である。すなわち、独立不定詞節と遂行的述部+INF 構文はどちらも遂行的に用いられうるが、両者の談話機能は等価ではない。例えば、(9a-b) は遂行的にも非遂行的にも用いられうる。後者の用法では、(9a-b) は話し手または聞き手に課せられた義務を叙述する記述文 (descriptive sentence) と解釈される。一方、独立不定詞節は純然たる遂行文であるため、そもそも記述文として用いることはできない。これは独立不定詞節の脱従属化では、様々な主節が集合的に表す発語内の力のみが構文フレームに浸透するからだと思われる。筆者の考えでは、複数の主節との関わりでゲシュタルト化が生ずる場合は、それらの主節に共通する意味成分のエッセンスのみが構文フレームに浸透する (図4)。筆者は複数の主節から共通の意味成分がとり出される認知的プロセスを「抽出」と呼ぶ。

図4：発語内の力の抽出
(IF^D =発語内の力(「指示」)； MC^P =遂行的主節； InfC =不定詞節)



図4において抽出される意味成分は、主節のもつ発語内の力(「指示」など)のみで、その他の具体的な意味はすべて捨象される。そうだとすると、独立不定詞節の発達過程の全容は図5である。

図5：独立不定詞節の発達

(‘⇒’=使用の規約；MC^p=遂行的主節；InfC=不定詞節；=偽記号；<+IF>=発語内の力)

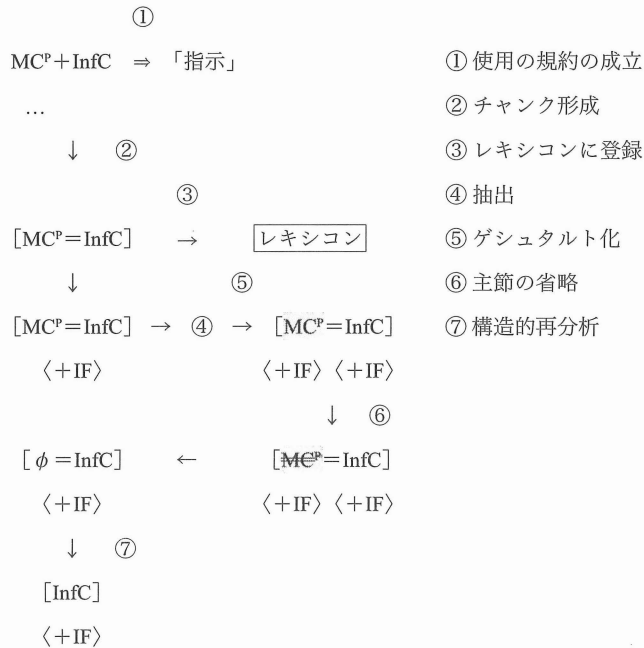


図5と図3の違いは、前者ではゲシュタルト化のプロセスに抽出が関わっているという点と、すでに脱従属化が完了し、主節構造が失われているという点である。

次に、以上の考察を念頭において疑似従属節感嘆文の発達に移ろう。まず、疑似従属節感嘆文の脱従属化はいつ頃完了したのだろうか。この度の文献調査⁸では、中英語期および EModE 期の疑似従属節感嘆文が[ϕ =SubC]か[SubC]かを判断する手がかり（メタ言語的コメント）を見つけることができなかった。したがって、残念ながら脱従属化が完了した時期を知る直接の手がかりはない。しかし以下に引用する Chaucer の例を見ると、この構文は14Cの末までにすでに確立していた可能性が高い。

(19) a. Allas, that they sholde euere cause fynde (*Troilus and Criseyde*, iv, 19)

b. Allas, that he, al hool or of hym slyuere, | Shuld han his refut in so digne a place ...

(*Ibid*, iii, 1013)

ちなみに Visser (1969: 1654) の引用する初出例はさらに14Cまで遡るが、16C後半から17Cになるとこの構文はかなり一般化してくる。したがって、少なくともこの時期までに[ϕ =SubC]から[SubC]への再分析が完了していたと考えてまちがいないだろう。

次に、先ほど独立不定詞節について見たように、疑似従属節感嘆文を生みだした構文

化にも複数の主節との組み合わせが関与している。この構文の母体とみられるのは、(20) のような様々な構文である。

(20) a. what prodigall portion haue I spent, that I should come to such penury?

[感嘆文+should^E 補文] (W. Shakespeare, *As You like It*, i. 1)

b. 'Tis wonder that an inuisible instinct should frame them to Royalty vnlearn'd ...

[It is + 名詞+should^E 補文] (W. Shakespeare, *Cymbeline*, iv, 2)

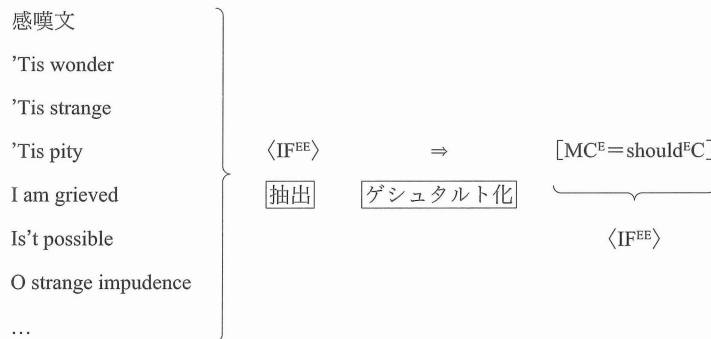
c. 'Tis strange ... he should affect her!

[It is + 形容詞+should^E 補文] (B. Jonson, *The Case Is Altered*, ii, 3)

この場合、おそらく主節のバリエーションは独立不定詞節のケース以上に多彩であろう。この構文に対しても図6のような抽出のプロセスが考えられる。

図6：発語内の力の抽出

(IF^{EE}=発語内の力(「感情表出」)；MC^E=感情的主節；should^EC=should^E 補文)



このプロセスで抽出されるのもやはり発語内の力（「感情表出」）だが、これはこれらの主節に共通する意外性（unexpectedness）の意味成分が感情表出あるいは感嘆の解釈につながるからである。このような抽出を想定する根拠は、ここでも疑似従属節感嘆文が遂行的にのみ——感嘆文としてのみ——使用されうるという事実である。例えば、感情的主節+should^E 補文 (cf. (20)) は遂行的にも非遂行的にも解釈しうる。後者の解釈では、感情的主節+should^E 補文は、主語の指示対象となる人物がある事実に対して特定の感情的反応を示すという事態を叙述する記述文とみなされる。⁹

以上の点から次のような疑似従属節感嘆文の発達プロセスがえられる。まず、主節+should^E 補文のうち (20) のタイプの文が「感情表出」という発話行為の方策として採用され、使用頻度が高まると、この方策は使用の規約としてルーティン化される。14C以降、(20) のような感情的主節+should^E 補文が文献に高頻度で現れることはよく知ら

れているので、このようなプロセスが生じたとしてもまったく不思議はない。続いてこれらのコロケーションにチャンク形成が適用され、[感情的主節+should^E 補文] が自律した構文フレームとしてレキシコンに登録される。その後、様々な主節の意味成分の抽出を伴うゲシュタルト化が生じて、主節の発語内の力（「感情表出」）が構文フレームに浸透する。この段階で、主節の感情的述部が「偽記号」と化し、主節に対して課される復元可能性の制約が無効となる（「復元可能性の内部充足」の状態）。かくして14C 頃に短縮形[ϕ =should^E 補文]が生じた。¹⁰ 場合によると主節の省略が一般化する助けとなったのは(21)のような感嘆表現と should^E 補文の組み合わせではないかとも思われる。


(21) a. This is above strange. That you should be so retchless!

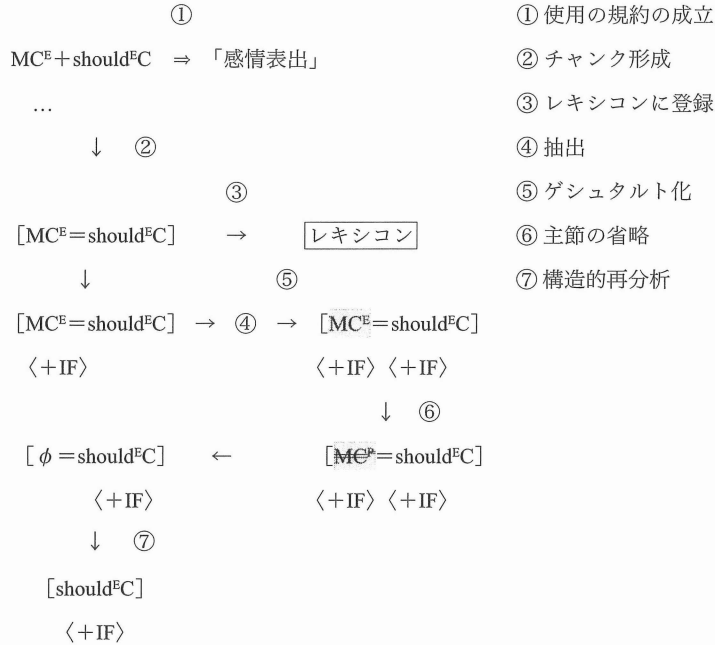
(B. Jonson, *The Devil is an Ass*, iii, 3)

b. O strange impudence, that these should come to face their sin! (Ibid., v, 4)

これらの例では、注10に述べた要因に加えて、先行する感嘆表現により感情的主節が余剰的に感じられ、感情的主節の省略が促進された可能性がある。しかし忘れてならないのは、たとえ先行する感嘆表現が主節の省略を容易にしたとしても、それだけで復元可能性の制約が無効になるわけではないということである。これらの表現は復元可能性の制約が働かないこと——「復元可能性の内部充足」の状態——を前提とした上で省略を促進したというのにすぎない。その後、[ϕ =should^E 補文]（省略形）が一般化するにつれていつしか省略構造であることが忘れられ、複文構造は最終的に単文構造（[should^E 補文]）へと再分析される。記述のように疑似従属節感嘆文が特に一般化するのはEModE以降とみられるので、この再分析はこの時期の前後に生じたものと推測される。以上、疑似従属節感嘆文発達のシナリオを図7に示す。

図 7：擬似従属節感嘆文の発達

（‘⇒’=使用の規約；MC^E=感情の主節；should^EC=should^E 補文；=偽記号；〈+IF〉=発語内の力）



最後に、以上の説明が可能となるためには、(i) 使用の規約の成立、(ii) チャンク形成、(iii) ゲシュタルト化、(iv) 構造的再分析というプロセスの想定が必要で、これらのプロセスは (iv) をのぞいてすべて構文化に特徴的なプロセスばかりである。つまり、脱従属化の現象は構文化という観点なしには説明が困難だと思われる。これが本論の結論である。

6. 結論

本論では、過去に原理だった説明がなされたことのない脱従属化をとり上げ、脱従属化の本質が構文化であり、その説明には構文化の観点が不可欠であることを示した。Evans (2007) のような過去の研究では、脱従属化は主節の省略によって生ずると主張しながら、なぜそのような省略が可能となるかが十分に説明されていない。主節のような文解釈に不可欠の要素は復元可能なコンテキストでのみ省略可能である。構文化に伴ってゲシュタルト化が生ずると、構文の個々の要素の意味は構文フレーム全体に浸透する。結果として、個々の要素はしだいに意味の特定性を失い、偽記号へと変わる。この段階で、構文を構成する個々の要素に対する復元可能性は無効となる。このプロセス

を筆者は「復元可能性の内部充足」と呼んだ。この段階に至ってはじめて主節の省略が可能となる。主節の省略がなされ、構文全体が複文構造から単文構造へと再分析されると脱従属化が完了する。

本論で示したように構文の発達プロセスに注目することで、共時的観点からは容易に説明できないような多くの現象に対してきわめて自然な説明が可能となる。本論の事例研究から構文の理解における通時的分析の重要性と有効性がお分かりいただけたら筆者にとっては大変光栄である。

注

1. Goldberg (2006) のもう 1 つの顕著な軌道修正は、構文とみなされうる要素の範囲に関わる。この新たな提案では、形式と機能の対という記号的特性をもつ要素はみな構文とみなされる (p.5)。つまり、文構造ばかりか拘束形態素や語、複合語、常套句、VP イディオムなどあらゆる文法の単位が構文とみなされる。この構文観の変化以来、‘construction’を「構文」と和訳するのは不適切だという指摘がたびたびなされてきたが、本論ではこの点を念頭に置きながらも誤解を避けるために伝統的な「構文」を用いる。
2. 要素脱落型の分岐型構文化には、脱従属化の他に節の 1 部分が省略によって脱落するケースがある。Good morning が I wish you a good morning から生じた発達など。
3. Luker (1916) によると、独立不定詞節は 13C 以降に発達してきた構文である。初期の段階において遂行的述部+INF 構文と独立不定詞節は自由変異形 (free variant) として使われたが、彼はこの事実を後者を前者の省略形とみなす根拠としている。
4. Visser (1969) などによると、should^E が文献に現れるのは 14C の初め頃である。同様に Visser の引用する疑似従属節感嘆文の初出例も 14C の初め頃のもので、疑似従属節感嘆文につながる省略形は should^E が現れてすぐに生じたものなのかもしれない。
5. 脱従属化ほどありふれた現象に対して過去になされた分析がわずかしかなしいというのはまさに驚きというほかない。
6. 最新の構文の定義によると、‘ne ... pas’も構文の 1 例とみなされる。注 1 を参照。
7. 誤解のないように断っておくが、主節の省略が原理上可能であったとしても、必ず主節の省略がなされるということではない。談話上の動機がなければ、たとえ条件が揃っていたとしても省略はなされない。したがって、構文化後も長期間にわたって複文構造を保持する事例があったとしてもまったく不思議はない。
8. 今回の調査では、疑似従属節感嘆文の口語的性質を勘案し、ME は Chaucer の作品を、EModE については Shakespeare と B. Jonson の劇作品を資料として用いた。また調査では、この構文が使用されるコンテキストに注目した。
9. じっさい She is surprised that he should resign のような非 1 人称の主節をもつ文には遂行的な解釈は生じえない。遂行性が生ずるのは主節主語が 1 人称の場合のみである。
10. 脱従属化へとつながった主節の省略がなされた動機については推測するほかないが、Visser (1969) は頓絶法 (aposiopesis) —— 発話を中断することで表現効果を高めるレトリック手法 —— によるものとしている。これは日本語において「～なんて信じられない」を「～なんて！」と省略して感嘆文が生じた例を念頭におくと理解しやすい。

参考文献

- 秋元実治 (2002) 『文法化とイデオロム化』 ひつじ書房, 東京.
- 秋元実治・前田 満 (2013) 『文法化と構文化』 ひつじ書房, 東京.
- Batchelor, R. E. and M. Chebli-Saadi (2011) *A Reference Grammar of French*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Beckner, Clay and Joan Bybee (2009) “A Usage-based Account of Constituency and Reanalysis,” *Language Learning* 59, 27–46.
- Bergs, Alexander, and Gabriele Diewald (eds.) (2008) *Constructions and Language Change*, Mouton de Gruyter, Berlin and New York.
- Bréal, Michel (1900) *Semantics* (translated by Nina Cust), William Heinemann, London.
- Bybee, Joan (2001) *Phonology and Language Use*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Bybee, Joan (2002) “Sequentiality as the Basis of Constituent Structure,” in Talmy Givón and Bertram F. Malle, eds., *The Evolution of Language out of Pre-language*, John Benjamins, Amsterdam, 109–134.
- Bybee, Joan (2003) “Cognitive Processes in Grammaticalization,” in Michael Tomasello, ed., *The New Psychology of Language: Cognitive and Functional Approach to Language Structure* (vol.2), Psychology Press, New York and London, 145–167.
- Bybee, Joan (2007) *Frequency of Use and the Organization of Language*, Oxford University Press. Oxford.
- Bybee, Joan (2010) *Language, Usage and Cognition*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Bybee, Joan (2011) “Usage-based Theory and Grammaticalization,” in Heiko Narrog and Bernd Heine, eds., 69–78.
- Bybee, Joan and Clay Beckner (2010) “Usage-based Theory,” in Heiko Narrog and Bernd Heine, eds., *The Oxford Handbook of Linguistic Analysis*, Oxford University Press, Oxford, 827–855.
- Chafe, Wallace (2008) “Syntax as a Repository of Historical Relics,” in Alexander Bergs and Gabriele Diewald, eds., 261–268.
- Chomsky, Noam (1991) “Some Notes on Economy of Derivation and Representation,” in Robert Freidin, ed., *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, MIT Press, Cambridge Mass., 417–454.
- Evans, Nicholas (2007) “Insubordination and Its Uses,” in Irina Nikolaeva, ed., *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*, Oxford University Press, Oxford, 366–431.
- Fried, Mirjam and Hans C. Boas (eds.) *Grammatical Constructions*, John Benjamins, Amsterdam.
- Fillmore, Charles J., Paul Kay, and Mary C. O'Connor (1988) “Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of *Let Alone*,” *Language* 64, 501–538.
- Gisborne, Nikolas and Amanda Patten (2011) “Construction Grammar and Grammaticalization,” in Heiko Narrog and Bernd Heine, eds., *The Oxford Handbook of Grammaticalization*, Oxford University Press, Oxford, 92–104.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work*, Oxford University Press, Oxford.
- Grevisse, Maurice (1980) *Le Bon Usage* (11th ed.), Duculot, Paris.
- Haiman, John (1995) “Moods and MetaMessages: Alienation as a Mood,” in Joan Bybee and Suzanne Fleischmann, eds., *Modality in Grammar and Discourse*, John Benjamins, Amsterdam, 329–345.
- Harris, Alice C. and Lyle Campbell (1995) *Historical Syntax in Cross-linguistic Perspective*, Cambridge

- University Press, Cambridge.
- Hilpert, Martin (2013) *Constructional Change in English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Hoffmann, Thomas and Trousdale Graeme (eds.) (2013) *The Oxford Handbook of Construction Grammar*, Oxford University Press, Oxford.
- Joseph, Brian D. and Richard D. Janda (eds.) (2003) *The Handbook of Historical Linguistics*, Blackwell, Oxford.
- Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Luker, Benjamin F. (1916) *The Use of the Infinitive Instead of a Finite Verb in French*, Columbia University Press, New York.
- 前田 (2002) 「法性と感情表出」『近代英語研究』19号, pp. 21-43.
- Maeda, Mitsuru (2008) “Insubordination in Old English,” in Masachiyo Amano, Michiko Ogura, Masayuki Ohkado, eds., *Historical Englishes in Varieties of Texts and Contexts*, Peter Lang, Frankfurt am Main, 93-107.
- 前田 満 (2013) 「感嘆文の構文化と構文性の発達」秋元実治・前田 満 (編)『文文化と構文化』ひつじ書房, 東京, pp. 329-364.
- Matsumoto, Meiko (2008) *From Simple Verbs to Periphrastic Expressions*, Peter Lang, Berlin.
- Morgan, Jerry L. (1978) “Two Types of Convention in Indirect Speech Act,” in Peter Cole, ed., *Syntax and Semantics 9: Pragmatics*, Academic Press, New York, 261-280.
- Price, Glanville (1984) *The French Language: Present and Past*, Grant and Cutler, London.
- Spears, Richard A. (1997) *Slang American Style*, NTC Publishing Group, Chicago.
- 鈴木英一・安井 泉 (1994)『動詞』研究社、東京。
- Traugott, Elizabeth C. (2003) “Constructions in Grammaticalization,” in Brian D. Joseph and Richard D. Janda, eds., 625-647.
- Traugott, Elizabeth C. (2008a) “The Grammaticalization of *NP of NP* Pattern,” in Alexander Bergs and Gabriele Diewald, eds., 23-45.
- Traugott, Elizabeth C. (2008b) “Grammaticalization, Constructions and the Incremental Development of Language: Suggestions from the Development of Degree Modifiers in English,” in Regine Eckardt, Gerhard Jäger and Tonjes Veenstra, eds., *Variation, Selection, Development: Probing the Evolutionary Model of Language Change*, Mouton de Gruyter, Berlin, 219-250.
- Traugott, Elizabeth C. (2012) “Toward a Coherent Account of Grammatical Constructionalization,” unpublished ms., Stanford University.
- Traugott, Elizabeth C. and Graeme Trousdale (in preparation) *Constructionalization and Constructional Changes*, Oxford University Press, Oxford.
- Visser, Fredericus Th. (1969) *An Historical Syntax of the English Language* III, E. J. Brill, Leiden.

資料

- Benson, Larry D. (1987) *The Riverside Chaucer*, Oxford University Press, Oxford.
- Schelling, Felix E. (ed.) (2006) *Ben Jonson Plays* (reprint), Pomona Press, West Yorkshire.
- Wells, Stanley and Gary Taylor (eds.) (1986) *William Shakespeare: The Complete Works* (original-spellingedition), Clarendon Press, Oxford.